

今回私たちは海外研修で台湾へ行き、小学校や幼稚園、台湾での名所を見学した。そこで私は台湾の国民性について理解を深めた。具体的には台湾人の積極性、自主性についてや、台湾がどの位親日国なのかということを体験した。

まず、台湾の基本的な情報として、親日国である他に日本に比べて温暖な気候である。また歴史的にみて他国から支配下に置かれる期間が長く、現在は台湾として実質的に独立しているが、中国との関係が複雑である。これらの背景を踏まえ、私は今回の台湾研修を通じて台湾という国を体験した。

2日目の立人国際幼稚園見学について体験したことについて説明する。私たちは園児たちに「けん玉」の授業をした。けん玉とは何かについてやけん玉の作り方を教え、一緒に作るという体験授業をした。その幼稚園では「小さな先生」という役割をもった園児がいた。園長先生からこの「小さな先生」は途中でつまづいている他の子を教えるという任務があると説明を受けた。今回の事例では、けん玉作りに苦戦している子を手助けしたり、私たちの拙い台湾語や英語を翻訳するような立ち回りをしたりしてくれた。日本ではあまり見られない役割であるがこれは台湾という国の教育方針が影響していると考えられる。その理由として、園長先生はこの幼稚園では特に自主性を大切にしていると述べた。授業についていけない子がいたら先生が助けるのではなく、園児たちが積極的に助けにいくような環境を目指しているため、このような「小さな先生」という制度があるそうだ。では「小さな先生」を任されることを嫌がることは無いのか疑問に感じたがその心配は要らないようだ。「小さな先生」を任命される園児はそのクラスで最も優秀であると評価された園児であるためとても名誉のあることであり、多くの子供たちが小さな先生になることをめざしているためだ。そのため、「小さな先生」が任務を放棄するようなことはないし、その園児が出来ないことがあれば皆で力を合わせて解決すればいいと考えているため、自主性を育むのに効果的な教育方針だと私は考えた。



3日目建安国民小学校、幼稚園を訪問見学した。幼稚園では園児たちと一緒に桜の絵を完成させる授業をし、小学校では万華鏡の授業をした。まず幼稚園で体験したことをまとめる。ここで、私が感じたことは園児たちや先生たちの受け入れが洗練されているという点だ。幼稚園側からすると私たちは授業するのに慣れていない海外の学生という印象を持つだろう。しかし、まるでこの円滑に進まない授業自体が初めでは無いような対応に私は感銘を受けた。私は台湾の国民性のひとつのフレンドリーでおおらかな性格に由来するものではないかと考えた。台湾は多くの国の支配を受けた歴史から、新しいものを拒むより受け入れる方が良いという国民性があるのではないかと考えられる。そのため今回の授業も「滅多にできない体験」として受け入れられ、対応が洗練されていたのではないと思う。



小学校では、児童と一緒に万華鏡を作る体験授業を行った。建安国民小学校は芸術に特化した学校のため、児童が思う「日本の景色」のデザインを手作りの万華鏡に落とし込むことで、万華鏡の中で日本を体験するという授業をした。ここでは「小さな先生」という役割をもつ児童はいなかった。しかし、一人一人の子供たちが分からないところを教え合うように進めてくれたため、教えるのに苦悩することは少なかった。ここでも台湾の教育方針は「自主性」を重んじているということを体験出来た。誰かが助けるだろうではなく、自分から手助けに行こうとする姿勢は見習わなくてはならないと感じた。

その他にも、5日間を通して台湾がいかに親日なのかを体験した。台湾は世界第3位に親日であることが知られているため、台湾人の中でも日本語を読んだり話せるような人がいたり、日本のキャラクターが展示されている場所も少なくなかった。2日目の幼稚園見学を終えてから華山藝文という場所を訪問した。華山藝文は、台湾のアートやイベントの複合施設で、日本統治時代の1914年に建てられた酒造工場をリメイクして造られた場所である。これは日本の支配下にあったときに作られた工場であるため、日本のアート作品も多く飾られていた。サンリオやジブリの有名な作品だけでなく、今流行っているアニメの展示物まであり、まるでここが日本であるかのように感じる場所であった。私が最も驚いたことはサンリオのキャラクターができてから何年なのかを祝う展示物まであり、台湾と日本が深く繋がりがあることが分かった。これは、台湾が日本に支配されていた歴史だけでなく、台湾

は他国の支配を受けた期間が長かったため、他国の文化に対して寛大な国民性になったといわれている。そのため、日本と貿易する過程で入ってくる新しい文化を柔軟に取り入れようとした結果、親日国になったのではないかと考えられる。

3 日目には国立故宮博物院へ行ったり、最終日に台北 101 へ登ったりすることで台湾の歴史について学んだ。まず、国立古宮博物館では、国宝や歴史的な作品をガイドさんに説明していただきながら鑑賞することが出来た。日本では目にすることが出来ないようなものが数多く展示されており、台湾の歴史を目や耳で体験することができた。また、台北 101 では台湾の景色をこの目に収めることが出来た。ここは 2004 年に完成した台湾の超高層ビルで、2007 年まで世界一の高さを誇っていた。台湾の李祖原が設計デザインを担当し日本の建設会社・熊谷組を中心とした共同企業体が施工を実施したもので、台湾を代表とする名所となっている。台湾の人だけが作っていたわけではなく、日本と台湾の共同作業である歴史的背景に心温まるような場所だった。

最後に海外研修を終えての感想として海外だから良い、日本は劣っているというわけではなく、海外にも日本にも違った良さがあるのだと感じた。特に台湾は地域の治安の良さや教育の程度などは日本とあまり変わらないため、ひと目で違いを見つける方が難しいと感じた。立人国際幼稚園の園長先生からの質問で日本の生徒と台湾の生徒にはどんな違いがあるのか聞かれたが私は答えることが出来なかった。強いて挙げるなら台湾の子供たちのほうが積極的なように感じたが、「台湾だから」とまとめられるようなものでは無かった。外向的な子もいれば内向的な子も居て、子供にも個性があるのだ。私はインターネットで台湾は積極的な人が多いと聞いて、「台湾人はみんな明るくて積極的」というステレオタイプをもっていたことを実感した。今回の研修で私の中にある偏見を見つけることができたことが大きな学びであり、今後も気をつけなければいけない課題である。ステレオタイプを無くすにはどちらかが劣っていると考えのではなく、どちらにも違った良さがあることを理解することである。台湾は私たちが困っている時に見ず知らずのひとが声をかけてくれる頻度が多いことが国の良さであり、日本は相手との距離感を尊重できる良さがある事が今回の台湾研修で学んだことである。